

若手研究者のウェルビーイングと対人関係

Well-being of Researchers:

A Psychological Assessment of the Influence of Human Relationship in and out of Laboratories

近藤（有田） 恵（京都大学こころの未来研究センター 特定研究員）

【メンバー】

平 石 界（京都大学こころの未来研究センター助教）

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター助教）

大石 高典（こころの未来研究センター特定研究員）

【ねらいと目的】

昨年度、京都大学女性研究者支援センターとグローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」の共同による「京都大学における男女共同参画に資する調査研究」の調査研究企画の採択により、申請者たちは「研究者のウェルビーイング：対人関係がパフォーマンスと精神健康に与える影響」の調査を行った。京都大学に在学、在職中の男女を対象に行った量的・質的調査からは、1. 職業生活に関しては、研究室における D4 以上の大学院生の存在と自尊心の関係、2. 社会生活（親密性）に関しては、私生活におけるパートナーの有無が特に女性研究者にとって大きな影響を与えていること、3. 研究生活に関しては、研究スタイルとして、個人研究と共同研究のバランスが若手研究者の幸福感に影響を与えていることが量的研究から示唆された。また、質的研究（インタビュー）からは、指導教官との関係性が研究生活や職業生活に大きな影響を与えること、また、職業選択や研究生活の選択における男女差が見受けられた。

しかしながら、この調査ではサンプル数が少ないこと、また、協力者が持つ背景（身分、研究分野、性別など）に偏りがあったため、得られた結果は示唆の域をでていない。現在、京都大学女性研究者支援センターの協力を得、京都大学と雇用関係にある女性研究者全て（教授、医員を除く）に調査紙を配布し、約 4 割からの回答を得ており、今後、男性研究者への調査を行うことにより、先の調査で示唆されたような若手研究者の傾向や男女の差異を明らかにすることができる。本研究では、若手研究者の幸福感において、業績や地位といった職業、研究生活だけではなく、研究スタイルを含む他者との親密性、対人関係がいかに影響を与えているのかを明らかにすることを目的とする。

【活動の記録】

2009 年 6 月 22 日

インタビュー調査（近藤、京都大学、男性協力者へのインタビュー）

2009 年 7 月 2 日

調査検討会（近藤、平石、内田、大石、京都大学、質問紙調査の内容検討）

2009年8月7日

研究会（近藤、平石、大石、京都大学、「京都大学内における若手研究者の動向」）

2009年8月31日～2009年9月2日

調査紙発送準備（近藤、平石、京都大学）

2009年9月18日

日本社会心理学会発表打ち合わせ

（近藤、平石、大石、京都大学、「女性研究者のウェルビーイング」）

2009年9月28・29日

インタビュー調査（近藤、京都大学、男性協力者へのインタビュー）

2009年10月2日

インタビュー調査（近藤、京都大学、男性協力者へのインタビュー）

2009年10月11日

日本社会心理学会発表（近藤、平石、大石、大阪大学）

2009年11月16日

研究会（近藤、平石、大石、「京都大学における男性研究者のウェルビーイング1」）

2009年11月17日

インタビュー調査（近藤、京都大学、男性協力者へのインタビュー）

2009年12月

データ入力

2010年1月18日

調査結果検討会（近藤、平石、内田、大石、京都大学）

2010年1月28日

調査結果検討会（近藤、平石、内田、大石、京都大学）

2010年2月8日

調査結果検討会（近藤、平石、内田、京都大学）

2010年2月17日

GCOE 成果報告会発表（近藤、平石）

2010年3月1日

研究会（近藤、平石、内田「京都大学における若手研究者のウェルビーイング1」）

2010年3月10日

研究会（近藤、平石、内田「京都大学における若手研究者のウェルビーイング2」）

【成果の概要】

本年度は、昨年度の予備調査をもとに京都大学と雇用関係にある男女研究者（研究員～准教授）に量的・質的調査を行った。男性研究者については、現在調査結果集計中のため、今

回は女性研究者の結果のみを報告する。女性研究者では、対象者 438 名のうち 167 名（うち 5 名は産休中、平均年齢 37.6 歳，SD=7.56）から調査紙の回答を得た。質問紙調査からは、1) D4 以上の学生が同じ研究室に多くいる場合、予備調査では自尊心が下がる傾向にあったのとは、逆に助成研究者では生の効果がみられた（研究員、助教のみ）。2) 研究スタイルについては、個人研究と共同研究のバランスについては必ずしも影響を与えていない。3) パートナーの有無については、予備調査と同様に配偶者などパートナーの存在がポジティブな感情を呼び起こす傾向があり、こと子どもの存在がポジティブな感情を呼び起こす傾向にあることが示唆された。また、個別インタビューからは、1) 医学系においては研究職につくまでに働く経験を持つ者が多いことや、職業としては研究職以外（医師、看護師など）への道をつねに持ち続けていることなどが語られた。また、京都大学外からよりも大学院からそのまま京都大学に残るといった者が多くみられた。2) 大学院時代の指導教官との関係においては、時間的な拘束や補佐的な役割を求められることが多かったことが語られた。3) 研究生活については、30 代の協力者からは、出産や子どもの人数、婚姻についての語りが多くみられ、このことは量的調査のパートナー・子どもの有無の結果ともあわせ、女性研究者にとって重要な意味合いをもつことが示唆される。また、子どもの問題については、教育と研究が課せられるいわゆる第一線の役職よりも期限付き研究員などの職種が有効であるという意見もみられた。今後は、他大学との調査結果とあわせ、研究者の幸福感の実態について明らかにしてゆきたい。